書評

V・マツケヴィチ

『アメリカとカナダで何をみたか』

一九五六年刊二四〇頁

В. Мацкевич: Что мы видели в США и Канаде. Государственное издательство политической экономии. Москва. 1956. 240 стр.

丸毛　忍

(一)

一九五五年の夏、ソ連の農業視察団が約二ヵ月にわたつてアメリカとカナダを訪問した。本書はその報告書である。

著者のV・マツケヴィチは視察団の団長で、当時ソ連農務第一次官の職にあつた。彼はスターリンの死後急に頭角をあらわしてきた人物で、その後農務大臣にすすみ、最近では国家経済委員会副議長をかねており、いわゆるフルシチョフ農政の実際の推進者だとみられている。本書は「私および視察団に加わつた私の同志たちの印象」(五頁)を語つたものだというが、視察団は十二名からなり、彼以外のメンバーは次のような人たちであつた。B・サベリエフ(農務省官吏)、N・グレーエフ(ウクライナ共和国首相代理)、A・エジョフスキー(農業機械省次官)、U・ゴルバシ(畜産専門家)、A・トルウプニコフ(農務省計画・経済局長、現農業経済研究所長)、P・バブミンドラ(農業機械専門家?)、A・シエブチエンコ(農務省顧問)、A・シローチン(不明)、N・バガーチ(農業機械省官吏)、B・ソコロフ(農学教授)、P・スベチニコフ(クバンのコルホーズ議長)。いずれもトップ・レベルの農業専門家であることがわかる。だが、大部分が外国、特にアメリカの農業をみるのは初めての経験のようであつた。

ソ連の農業視察団のアメリカ訪問は、アイオワ州の有力紙『デモイン・レヂスター』の招待がきつかけとなつて、米ソ両国間の農業視察団の交換というかたちで実現されたものであり、米ソの雪解け現象の顕著な一例として、わが国の新聞などにもかなり大きく報道された(『総研月報』八三号の拙稿参照)。当時ソ連は第五次五ヵ年計画(一九五一～五五年)の農業生産の行詰りを打開するため、フルシチョフの指導下に思切つた農業政策の転換を行つており、アメリカの農業、特にとうもろこしの栽培と労働節約のやり方に改めて着目し、そうした技術の積極的な導入を考慮していた。だからアメリカ農業の視察はソ連側にとつては極めて現実的な要請であり、視察団の態度も真剣であつたし、その成果も、後でふれるように、かなり大きなものがあつたとみられる。

ソ連のコルホーズ、ソフホーズの農業機械化は最初は恐らくアメリカに学んだと考えられるが、その後、ソ連はすでに「世界で

もつとも大規模な機械化農業」、社会主義農業であるとなし、イデオロギー的な立場から外国農業との体制的な相違のみを強調して、ソ連農業と外国農業との具体的な比較を峻拒しつずけ、表面的には、もはや外国の農業技術や農業経営から学ぶべき何物もないかのような風潮が支配的であつた。したがつてソ連で発表される数少い外国農業の研究もまた、一般に、見方がひどく政治的、公式的であつて、具体的な認識を欠いているように思われた。ただ今次世界大戦の直前、M・クバーニンが具体的なデーターに基いてアメリカ農業とソ連農業とを比較しながら、ソ連農業の立遅れ、例えば、その労働生産性がアメリカ農業の四・五分の一にすぎないといつたことを客観的に立証し、立遅れをどうして克服するかを論ずる二、三の労作を発表している（邦訳カストロフスキー『ソ連農業の発展』三一七～三三六頁にクバーニンの論文の一つが採録されている）。M・クバーニンのソ連農業の生産力水準についての認識は、その将来の可能性の評価を別にすれば、アメリカのもつとも反ソ的な学者の一人であるN・ジャスニイの見解と大差がない。そのせいかどうかはわからないが、彼は論文発表後いくばくもなく追放の憂目をみたと伝えられている（Kahan, A., A Note of Estimates of Soviet Grain Output 1934～38. *Journal of Political Economy*, June. 1956. p. 259.

しかし、スターリン死後ソ連の外国農業に対する態度には大きな変化があらわれはじめた。外国の農業をもつと具体的に研究する必要のあること、そこには体制こそちがえ、ソ連にとつてなお多くの学ぶべきもののあることを再認識したようである。農業視察団の派遣もその一例にほかならない。この報告書は、視察団交換の趣旨からいつて当然かも知れないが、体制の問題を取上げることを避け、したがつてアメリカ農業の体系的な把握や評価はほとんど行つておらない。もつぱらソ連の農業に取り入れるという実用的な見地から、アメリカ農業のすぐれている点を技術を中心に平易に解説し、ソ連の農民に紹介するという目的で書かれているようにみえる。マッケヴィチも「私たちは合衆国とカナダの農業生産の状態をみて、アメリカの経験のなかからもつとも価値あるものを選び出し、進歩的なものは何によらず思切つて広く取り入れるよう、わが国のコルホーズ、ソフホーズ、MTSにすすめたいと思う」（二三八頁）とのべている。だから、そういう意味でみるなら、本書のアメリカ農業の把え方はなかなかユニークだし、またソ連の視察団がアメリカ農業のどんな点に関心をもつたかや、彼等のアメリカでの勉強ぶりがなみなみならぬものであつたことなどが、よくわかつて面白い。本書ではアメリカ農業とソ連農業の直接的な比較はむしろ背後にかくされているが、マッケヴィチらのアメリカ農業についての認識は、かのM・クバーニンの論文の理解につながるものがあるように思われる。私たち日本

人もまた、この報告書から、アメリカ農業についていろいろと実際的な知識を学びとることができるであろう。なおついでながら、ソ連における最近のアメリカ農業の研究がこのようなものばかりでないことはいうまでもない。その一例として、戦後の農業恐慌を論じたE・L・シーフリンの『世界大戦後のアメリカ農業』(Шифрин, Э. Л. Сельское хозяйство США после мировой войны, 430 стр. 1956, Москва)をあげておこう。

(二)

この報告書は目次から明かなように、ソ連視察団のアメリカおよびカナダの農業地帯の旅行記と、彼等の興味をひいた両国の重要な農業部門の解説との二つの部分からなっている。

ソ連の農業視察団は、アメリカでは七月一六日から八月二五日まで四〇日間、十二州にわたって、五〇以上の農場および数多くの博覧会、農機工場、農科大学を訪ね、カナダでは八月二五日から二週間、四州にわたり一〇の農場および試験場、工場をみた。この間の旅行記は多くのエピソードをまじえながら、専門家の眼でアメリカ農業の姿がいきいきと把えられており、またアメリカの農場の労働力の少いことや、その専門化、肥料商や農機具商のサービスぶり、アメリカ農民の実用主義的な労働節約のための着想(主として小作業の機械化)などについての秘かな驚きが語ら

目次

まえがき
アメリカ合衆国とカナダの旅
『デモイン・レジスター』紙の招待
アメリカの農業生産
アイオワ州の二十日間
ネブラスカ、テキサス、南ダコタ、ミネソタの農業者と畜産業者
ミシガン——イリノイス——カリフォルニア
カナダの旅
アメリカの経験から
アメリカのとうもろこし
酪農
肉牛飼育
豚肉の生産
家禽飼育
飼料基礎のつくり方
農業機械製作の発展
試験研究と農業普及の組織
むすび
(地図二、写真九〇余枚)

れている。マッケヴィチは旅行を終つて後ワシントンで次のような感想をのべている。「ソ連の農業視察団はアメリカで……コルホーズやソフホーズにも取入れることのできそうな多くの興味深い有用な事柄をみた。わたしたちは目下これらを詳細に検討中であるが、雑種とうもろこしの採種組織、産卵鶏および豚の改良における雑種強勢の利用、家畜の蕃殖・肥育・飼料給与の方法、トラクターの各種作業機を前方に装着する方法、農場のさまざまな小作業の機械化が特にわたしたちの関心をひいたことは、今すぐでも明言できる」（八九頁）と。カナダ旅行の結論もほぼ同様なものであつたようである（一〇五頁）。

これらの視察団が関心をもつた問題については、部門別の解説の部分でもう一度整理した上で、アメリカのやり方が紹介されている。この解説と、例えば、ブルガーニン首相の『第六次五カ年計画の指令についての報告』とを読み較べてみると、ソ連の第六次五カ年計画（一九五六～六〇年）が農業視察団のアメリカ訪問の成果を多数取り入れていることがわかる。すなわち、雑種とうもろこしの栽培、穀物の二段階式刈入法、エロージョンの防止、畜舎の設計や飼料の給与方法、小作業の機械化（特に畜産における）、肉牛の放牧、作業機をトラクターの前部に装着し一人で運転する方法、車輪つきトラクターの増加、地帯に適した農業機械の製作、尿素肥料や農薬の普及、地域の特性を無視した従来の劃一的な試験研究や改良普及についての反省などのなかに、数多くの事例を発見することができるであろう。この報告書はソ連の農業については直接何も語つてはいないが、そうした見地からして、第六次五カ年計画におけるソ連農業技術の問題点と水準を写し出す鏡の役割を演じており、そこにも私たちの興味をひくものがある。

マッケヴィチは「視察団がアメリカでみたものは、社会主義農業の優越についての私たちの確信を強めた、アメリカ人が数十年を要したものなら、私たちは数年でやりとげることができるし、やりたいと思う」（二三六頁）と書いているが、この問題は体制の差だけでそう簡単に片ずくことではあるまい。ソ連を訪問したアメリカ農業視察団の専門家の見解によると、例えば、ソ連における雑種とうもろこしの栽培の見透しはかなり悲観的なもののようである。ソ連が以上のようなアメリカの農業技術を取り入れてどの程度こなし得るかは、第六次五カ年計画の遂行に大きな影響のある問題だといえよう。しかし、ながい間工業化の犠牲になつてきたソ連農業が、アメリカ農業とその生産力の高さを競うようになるまでには、なおかなりの時間が必要なことは明白である（本書のより詳しい内容については『のびゆく農業叢書』第五号の拙訳ダイジェストを参照されたい）。